

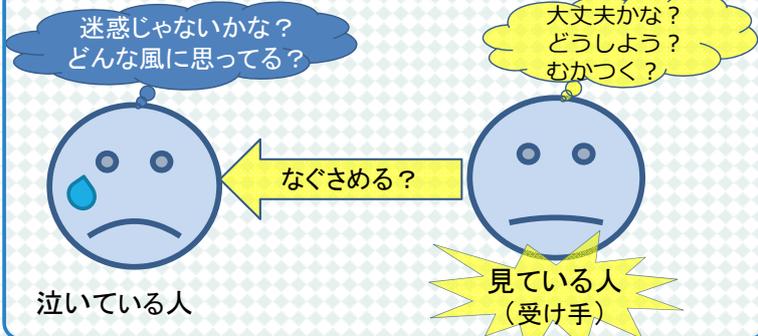
泣き虫に慰めのことばをかけるか？

泣いている人に対する援助を左右する要因の検討

—事態の深刻度と泣く頻度に着目して—

高橋淳美・半澤梨香

着想の経緯



援助場面の状況設定

事態の深刻度 (=泣き理由の深刻度)

・責任性が低く、重大性(深刻度)が高いと認知するほど、困窮者への援助意思が高い(竹ノ山, 2005)。

→本研究では、深刻度をとりあげた

泣く頻度

・人前で泣くことは本来抑制されるべき

→これを繰り返す人は迷惑・うっとうしいなどマイナスな印象を持ちやすいのでは？

「また泣いている」という慣れから、援助しなくなるのでは？

目的

辛い出来事により泣いてしまった人に遭遇したとき、事態の深刻度と相手の普段の泣く頻度は、受け手の気持ちと援助行動にどのように影響するのか、以下のモデルを用いて検討する。

Weinerモデル

認知 - 感情 - 行為



方法

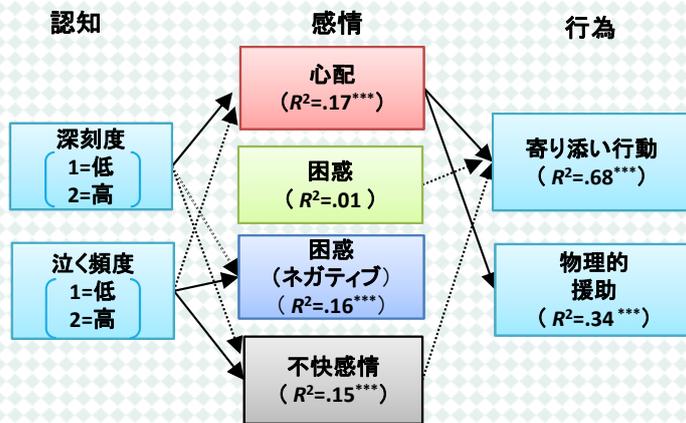
【調査対象者】

宮城学院女子大学の学生109名を分析対象者とした。

【手続き】

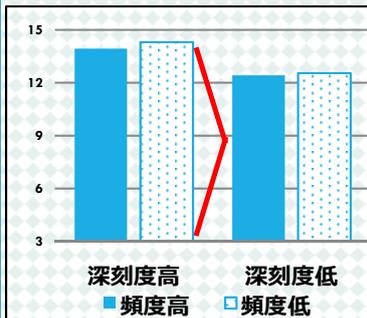
仮想場面の提示 深刻度×頻度(高・低) (高・低)の4種類作成し、調査対象者にランダムに配布	深刻度	泣いている理由の深刻度(コーヒーのこぼし具合)
	頻度	普段から泣いている人かどうか
援助行動の 実行可能性の測定	寄り添い行動	そばにいるなどの泣いている人に寄り添った援助
	物理的援助	物をあげるなどの物理的な援助
受け手の 感情の測定	心配	相手に対して放っておけないと思うなどの感情
	困惑	自分が何をして良いかわからないなどの感情
仮想場面の 操作チェック (深刻度について)	困惑(ネガティブ)	こんなところで泣かれて困っているなど自分に向かう感情
	不快感情 ※補足	相手に対して腹が立つ、面倒くさいなどの感情

結果

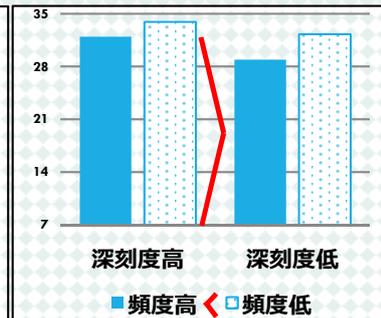


※矢印の実線は正の相関、破線は負の相関を示す

<物理的援助>



<寄り添い行動>



深刻度が低い場合より高い場合の方が「飲み物を買ってきてくれる」、「背中をさする」などの援助をしてもらえる。

深刻度が低い場合より高い場合、また些細なことで泣く人よりあまり泣かない人の方が「そばにいる」、「話を聞く」などの援助をもらえる。

まとめ

- 認知から感情への影響、感情から行為への影響を見てみると状況が深刻であることは、受け手に心配を生じさせ、援助行動を促進する。
- 普段からよく泣く人は、受け手にネガティブな困惑と不快感情を生じさせ、寄り添い行動を抑制する。
- 認知による行動の差を見ると、物理的援助は些細なことで泣く人でも、あまり泣かない人でも差がないことがわかる。

泣き虫だと、心からの援助はされない(´;ω;`)

しかし、深刻度が高い状況ならば、普段泣き虫な人であっても、泣かない人と同じぐらいには、物理的援助をされる！

些細なことでは人前で泣くのは抑制すべきであり、そうしていれば、どうしても我慢できずに泣いてしまったとき、心配してもらえて、不快に思われずに心からの援助されると考えられる